

よこせうら 横瀬浦開港 450周年を記念して

佐世保
遺跡
レポート



ルイス・フロイス像

1562年、みやのまえ宮の前事件により平戸を離れたイエズス会は、横瀬浦を布教の新天地とし、領主である大村純忠と開港協定を結んだ。横瀬浦は大いに繁栄。すみただ純忠はこの地で洗礼を受け、日本初のキリシタン大名となる。港をのぞむ小高い丘に教会が建てられ、教会周辺には繁華街が形成され、多くの商人たちが訪れ賑わったという。遊廓があった「丸山」、キリスト教徒の集落だった「上町・下町」、その途中の橋は「思案橋」と呼ばれるなど、いまの長崎の原型があり、その賑わいが伝わってくるようだ。

だがそのような繁栄を極める中、町は焼きつくされてしまう。開港からわずか1年後の1563年8月のことである。その後、ポルトガル船の入港地は、福田浦（長崎市の西海岸）、そして長崎へと移っていった。

<宣教師が来た当時の情勢>

1562年の佐世保・針尾島付近はひらどまつら平戸松浦とそうけまつら宗家松浦と大村の領地争いの中にあり、そこに大村を敵視する武雄のごとうたかあき後藤貴明が平戸松浦隆信の次男まつらたかのぶ惟明を養子に迎え、佐世保方面への進出を図っていて、四つどもえの不安定な力関係のなかで戦が続いていた。さらに横瀬浦の領主である大村氏の家臣の一部にはキリスト教徒に反感を持つ者もいて、大村領内は不穏な政治情勢の中にあった。

<主な関係人物>

■ルイス・デ・アルメイダ（修道士） 1525-1583

1562年横瀬浦を調査し、豊後にいる神父トルイスに報告。横瀬浦に前準備として入り、トルイスを迎える準備を整える。献身的な布教活動とその人柄で人々に愛された修道士。

■コスメ・デ・トルイス（トールス）（司祭・神父）¹⁵¹⁰⁻¹⁵⁷⁰

1551年、日本を出国したザビエルに代わりイエズス会の日本布教長として教会発展の基を築いた。1562年歓迎ムードのなか横瀬浦に上陸し、大村純忠を洗礼し日本人初のキリシタン大名を誕生させる。その後も各地で布教活動を行い1570年天草の志岐教会で亡くなった。

■ルイス・フロイス（司祭・神父） 1532-1597

トルイス上陸の1年後、横瀬浦繁栄期に日本初上陸。その後、平戸から口之津へ渡り、1565年1月京都へ行く、念願のミヤコを見聞し多くの報告書をしたためる。信長や秀吉と謁見し、特に信長とは約20回も会い、手厚い待遇を受けている。しかし信長の死後、秀吉の下した禁教令により布教活動は厳しくなる。そんななか長崎で病没する。「日本史」の著者でもある。「日本史」は布教活動を論ずる教会史であるが、一方において西日本の諸侯・武将の動静、日本人の庶民生活、民間信仰などに関する記述はきわめて貴重で第一級の史料となっている。特に信長・秀吉などの権力者のひととなりがいきいきと描かれた文面は大変興味深い。

■大村純忠（18代大村領主・三城城主1533-1587）

有馬家からの養子として大村へ入り家督を継ぐ。1563年横瀬浦で洗礼を受け、ドン・バルトロメウと呼ばれた。1565年に福田を1570年に長崎を開港し南蛮貿易を推進した。1580年、長崎をイエズス会に寄進。1582年には天正遣欧少年使節を送り出した。1584年、龍造寺隆信に屈し家督を善前に譲る。

■後藤貴明（19代武雄領主・塚崎城主1534-1583）

横瀬浦事件の首謀者といわれている。元々は大村家の跡継ぎだったが後藤氏に養子に出されている。そのことによる恨みからか、生涯大村純忠と敵対する。横瀬浦事件の後にも平戸松浦と組んで純忠の三城城を攻めるが失敗に終わっている。

■針尾伊賀守（針尾領主・針尾城主??-1572）

横瀬浦の対岸に位置する針尾島の領主。横瀬浦で奉行を務めるが後藤貴明と手を組み、針尾瀬戸で宣教師を襲撃する、しかし宣教師は乗っておらず失敗に終わる。フロイスの「日本史」に針尾に城を構える殿「ハリボウ」として紹介されている。

横瀬浦周辺の地図と予想航路

Googleマップより



